



熊中・熊高100周年

青年江原会

「ディスカバー士君子」6年の歩み



政治(党派)と学校

◆ 覇権争い

- 「民権」派對「国権」派
 - 小選挙区制のもとでの対立
- 政党が私立学校を作る
 - 政党の勢力拡大が目的

◆ 民権派の作った学校

- 実学党系 大江義塾
- 民権党系 共立学舎

◆ 国権派の作った学校

- 紫溟会系
 - 同心学舎・濟々巒



被支配地域としての熊本の歴史

- ◆ 菊池家・阿蘇家による支配が続いていた
- ◆ 室町時代に両家は中央政権に倒される
- ◆ 以来、熊本は中央から支配される
- ◆ 加藤清正の支配
 - 肥後人から「清正公さん」と親しまれる
- ◆ 細川家の支配
 - 清正ほどの人気はない



清正公と細川家

◆ 加藤清正

- 移封時わずか3千石の大名に過ぎなかった
- 54万石を治めるに足る家臣団を持たなかった
- 地元熊本人を家臣として召し上げた

◆ 細川家

- 元来、足利幕府以来の大大名
- 家臣団を引き連れて来た
- 熊本人は出世できない
 - 「肥後の引き倒し」「議論倒れ」



「ぬしや、どこや？」

- ◆ 熊本で「出身校」といえば「高校」のこと
 - 高校閥社会という批判
 - なぜこのような妙な「習慣」があるのか？
- ◆ 熊本の近代教育史をたどると答えが出る
 - 幕末
 - 明治維新
 - 西南戦争



幕末の肥後の諸勢力

- ◆ 勤王党
- ◆ 実学党
- ◆ 民権党
- ◆ 学校党



勤皇党

- ◆ 宮部鼎蔵が代表的存在
 - 天王山の乱・池田屋事件「人斬り鼎蔵」
- ◆ 下級武士が中心
- ◆ 「神風連」の春日塾
- ◆ 「廉恥」を重んじる
- ◆ 明治9年の「神風連の乱」で消滅



実学党

- ◆ 改革派であり、反主流派
 - 横井小楠が中心
 - 明治3年時点では熊本県政の実権掌握
- ◆ 「進取」の気風
 - 熊本医学校
 - 熊本洋学校（明治6～7年まで存続）
 - 大江義塾（明治15年～明治19年）
 - 熊本英学校・熊本女学校に引き継がれる
- ◆ 公議政党を目指す
 - 植木学校の「民権党」と協力
 - 「民党派」政友会・自民党（自由党系）



民権党

- ◆ 宮崎八郎が中心
- ◆ 青年層が支持
- ◆ 植木学校 「元気」を標榜
 - 明治8年設立。半年で消滅
 - 西南戦争では「熊本協同隊」として薩軍に参加
- ◆ 相愛社
 - 実学党と公議政党を目指し「民党派」形成
- ◆ 共立学舎(明治12年～明治15)



学校党

- ◆ 肥後熊本の保守本流
- ◆ 藩校「時習館」出身者
- ◆ 明治維新では改革のバスに乗り遅れた
- ◆ 明治10年の西南戦争では敗戦
 - 「熊本隊」として薩軍に参加
 - 中隊長以上の幹部は全員戦死
- ◆ 戦後は佐々友房(当時は小隊長) が中心
 - 保守本流の活性化をはかる
- ◆ 紫溟会
 - 国権党・自民党(民主系)



時習館

- ◆ 肥後の絶対的多数派「学校党」の母体
- ◆ 幕末当時「佐幕」派
 - 細川家が大藩になったことへの恩義
- ◆ 事大主義の議論倒れ
 - 明治維新のバスに乗り遅れた
- ◆ 日本の歴史の流れに後れをとるまい
- ◆ 西南戦争後、「国権派」を形成



国権派の同心学舎設立

- ◆ 明治12年高田原(現下通1丁目ツインビル)
- ◆ 佐々友房らが保守本流の活性化を図る
 - 人材の育成と党派の勢力拡大
- ◆ 時習館の伝統の改良と、各党の良い点
- ◆ 「三綱領」という政治的・対外的スローガン
 - 正倫理 明大義
 - 重廉恥 振元気
 - 磨知識 進文明



佐々友房

- ◆ 西南戦争時、三の岳守備の小隊長
 - 内坪井連鎖撫隊隊長として熊本隊に参加
- ◆ 戦後は宮崎で入獄
 - 獄中で人材育成により、国家救済を決意
 - 出獄したら学校をつくる
- ◆ 敢えて、当時の国家の教育方針に反対



西南戦争後の熊本の教育

- ◆ 文部省の方針 県立熊本中学
 - 現実主義的知育偏重
 - 立身出世主義
- ◆ 宮内省の考え 濟々鬘
 - 東洋儒学思想に基く知徳併進全人教育
 - 熊本出身の元田永孚により宮内省に報告
 - 恩賜金
 - 当時は世間に逆流していた



濟々鬘の誕生

- ◆ 明治15年 同心学舎を解散して創立
- ◆ 国権党の議会制圧
- ◆ 教育界に濟々鬘の覇権
 - 明治21年県立熊本中学廃校（県予算の0査定）
 - 民党派には県内に行く中学校なし
 - 泣く泣く国権党の濟々鬘、あるいは県外
 - 後には「県立濟々鬘」となり県下に分鬘



濟々鬘の教育方針

- ◆ 「教育は事務に非らず感化なり」
- ◆ 「世の事は義三部、情七部」
- ◆ 水戸学の忠孝無二
- ◆ 皇室中心主義
- ◆ 時習館伝統の文武両道
- ◆ 横井小楠の和魂洋才
- ◆ 熊本実学派・元田永孚の智徳併進
- ◆ 肥後教育の長所を集め、全人教育
- ◆ 中村正直「西国立志編」



濟々鬢出身の漢学の三大家

- ◆ 宇野哲人 東京大学
- ◆ 狩野直喜 京都大学
- ◆ 古城貞吉 東洋 早稲田 慶応大学



森 有礼 文部大臣の来熊

- ◆ 明治20年1月熊本中学と済々黌を視察
 - 時代に逆行した済々黌の教育に感心
- ◆ 政府要人 井上 毅(熊本出身)とも昵懇
- ◆ 帰京後、天皇に済々黌の素晴らしさを奏上
- ◆ 以後、西南戦争後の文部省と宮内省の対立が解ける
- ◆ 済々黌の名が全国に知られる
- ◆ 結果、熊本に第五高等中学が誘致された
- ◆ この時点では「九州帝大」の話も

第五高级中学





熊本の県立中学校の歴史

- ◆ 県立千葉中学
 - 明治10年の西南戦争で焼失
- ◆ 県立熊本中学
 - 政治的には中立的
 - 後の熊本中学とは別
 - 唯一の県立中学校
 - 明治21年廃校
 - 県予算の0 査定
 - 県下の中学校は私立「済々黌」のみとなる
- ◆ 県立済々黌
 - 政党の私立中学校が県立に



濟々鬘の変質

- ◆ 創立2年目に恩賜金を受ける程であった
 - この創立期に野田 寛先生が濟々鬘に学ぶ
- ◆ 国権党の議会制圧
 - 有力支持者の師弟の入学
 - 学力の低下
- ◆ 粗野の風が目立ってきた
 - 「元気を振るう」を誤解
 - 制裁・いじめ



熊中創設までの野田 寛 先生

- ◆ 幼少期には儒学に親しむ
 - 幼名、政雄。小学校は免除された
- ◆ 熊本中学(旧)に入学するが、すぐに退学
 - 生徒に本気で勉強する風がない
- ◆ 濟々黌入学(明治15年秋。二級に編入)
 - 寄宿舎に入り佐々友房の薫陶を受ける
- ◆ 上京遊学し英語、西洋哲学(東大)を学ぶ
- ◆ 明治26年7月帰熊して濟々黌で教職



濟々黌入学までの野田 寛

- ◆ 儒学に造詣が深い
 - 後の「士君子」という造語の源
 - 小学校は免除
- ◆ 明治15年6月濟々黌の1期生に追加応募
 - 父淳朴は入学反対。医者を継いで欲しかった



濟々鬘在学時の野田 寛 先生

- ◆ 父は専科生での入学しか許さなかった
 - 後、宇野七郎(紫溟会報)の助言で本科生
 - 「濟々鬘に一才子を得た」の佐々の言
- ◆ 「画図湖事件」
- ◆ 父により「寛」と改名
 - 幼時よりの頑迷さの改善をねらう
- ◆ 父の死
 - 退学・就職を決意するが学費免除の特別待遇
 - 卒業後、佐々の好意で上京遊学



上京後の野田 寛 先生

- ◆ 国民英学会・東京英学校
- ◆ 東大哲学科専科
 - パーソナリティーの確立
 - 東洋的人格主義
 - 自由の風
- ◆ 有斐学舎での共同生活
 - 「白足袋事件」
 - 濟々鬢の強がりの悪風が東京まで拡大
- ◆ 大学卒業後は佐々の一存で帰熊
 - 「濟々鬢に行け！」



濟々鬘教師時代の野田 寛 先生

- ◆ 濟々鬘OBとして、幹事
- ◆ 教師として濟々鬘教育の挽回に心血
- ◆ 佐々友房の信任
 - 井芹経平校長（千葉中・師範学校）を文部省へ
 - 野田寛幹事（濟々鬘）に濟々鬘教育を任せる
 - この時代、佐々が濟々鬘にあてた手紙の宛名には必ず井芹・野田、両名の名
 - 後、熊中に佐々の長男、信一が入学



濟々鬘の分割

- ◆ 明治32年中学校令改正
 - 定員が600名を超えないこと
 - 必然的に濟々鬘は分割しなければならない
 - 第一・第二の二つの濟々鬘
 - 黒髪町の新校舎を第一濟々鬘とする
 - 第二濟々鬘は藪の内の旧濟々鬘の旧校舎
- ◆ 二つの問題
 - 井芹経平・野田寛どちらがどちらの校長か
 - 二校のそれぞれの校名をどうするか



「一幹両枝」と濟々鬘の分鬘

◆ 一幹

- 野田先生が佐々友房の薫陶を受けた時代

◆ 両枝

- 野田先生と井芹経平が挽回しようとした時代の濟々鬘の鬘風を受け継ぐ二校

◆ 分校

- 濟々鬘の分鬘 八代、鹿本、天草分鬘
- 熊中の分校 玉名分校
- 現在でも玉高の卒業式には熊高校長が出席する



井芹経平と野田 寛

- ◆ 佐々の両名への信任
- ◆ お互いに信任しあう
- ◆ 井芹校長の考え
 - 濟々鬻生え抜きの野田先生に「濟々鬻」を
 - 井芹(濟々鬻第5代鬻長)は師範学校出身
 - 同様な立場の第2代鬻長八重野は失脚した
- ◆ 野田先生の考え
 - 現職の濟々鬻鬻長の井芹を「濟々鬻」に



校名問題

◆ 県案

- 「済々中学」と「熊本中学」
- 野田先生の反対

◆ 野田先生の案

- 伝統ある「済々黌」を残さなければいけない
- 「熊本県中学済々黌」
- 「県立熊本中学」



野田 寛 先生の選択とその理由

- ◆ 初期の済々黌教育の良い所は継承したい
 - 「済々黌教育に磨きをかける」
 - 佐々は弘道館の教育を目指しつつ、時習館教育の良い所は、これを継承した
- ◆ 変革への強い思い
 - 済々黌に止まれば、OB連を無視できず、改革が中途半端になる恐れ
 - 新しい学校で新天地をひらく
- ◆ 前任の井芹への遠慮



野田校長の第二濟々鬘・熊中

- ◆ 校舎は藪の内のオンボロ校舎
 - 濟々鬘の旧校舎を引き継いだため
 - 濟々鬘の宝物を現在の熊高が所持する理由
 - 元田永孚自筆の教育勅語
- ◆ うるさいOBがない
- ◆ 守るべき伝統がない



熊中の大江移転

- ◆ 明治37年10月に移転
- ◆ 藪の内は熊本城のお膝元
- ◆ 旧勢力から地理的に離れたかった
 - 地理的に遠いため、旧士族師弟は黒髪へ
- ◆ 川向うの進興地域「大江村」を選ぶ
 - 評判をきき、新興サラリーマンや商業者の師弟がわざわざ入学



江原会の名前の由来

- ◆ 野田先生自身が命名
- ◆ 「大江原頭」に由来
- ◆ 同窓会にさえ学校名を入れたくない



士君子の由来

- ◆ 明治35年佐々の欧州帰国談にヒント
 - 「今日の粗野な日本に比べ」
 - 英国紳士
 - イートン校(パブリックスクール)
- ◆ 自らの理想とする人間教育との一致
 - 幼時よりの漢籍の知識
- ◆ 「士君子」誕生
 - 野武士 変質した済々黌の教育
 - 古武士 熊中教育の理想



無名の校門

- ◆ どこにも校名がない校門
- ◆ 舟がぶつかり削れている(厩橋の橋桁)
 - 難苦耐忍を表わす
- ◆ 校訓
 - 濟々鬻三綱領は外向きの(政党)スローガン
 - 熊中校訓は内向きのもの



講学寮の設置

- ◆ 生徒と教師が同じ屋根の下で寝起きする
- ◆ 英国式寮
- ◆ 生徒の自治に任せる
- ◆ かつての濟々鬘での体験
 - 佐々と暮らした寮生活

校訓

◆ 凡そ本校の生徒たる者は教育の聖勅を奉體し、戊辰の大勅を格守し、誠實心を乗り、禮敬身を持し、善を為すに勇に、誤ちを改むるに敏に、己に克ち慾を制し、身體を練磨し、艱苦に耐忍し、専ら修学に勤め、敢て小成に安んずることなく、日夜淬礪して士君子たるの修養を完うし、国家の忠良たることを期すへし。此志を堅持して移らざる之を立志と謂ひ、此志を實行して倦まざる之を篤行と謂ふ。

諸子其れ立志篤行、以て本校教育の主旨に副へよ。



校賦

落合東郭

東有阿蘇西金峰
莽々蒼々望不窮
百雉名城占形勝
樓櫓突兀凌碧空
青年有為抱遠志
讀書學劍氣虹如
山河跋涉還快事
皎然日月照心胸
血性男子唯磊落
一代人物在眼中
雄飛四海豈夢日
風雲變化蛇作龍